

京都仁和寺と輝津館所蔵の「日本図」

角 田 清 美

はじめに

先の報告で、わが国における飛鳥時代から幕末までの、地図の作成や地理的視野の拡大について概要を述べた(1998)。その中で、「現存する最古の地図は京都・仁和寺に保存されている1305年(嘉元3)のもの」であることを紹介したが、具体的な事柄については触れなかった。

一方、2004年(平成16)11月、鹿児島県川辺郡坊津町の坊津歴史資料センター輝津館きしんかんにおいて、『坊津一乗院聖教類等』と称する鹿児島県指定有形文化財の古文書類の中から、「建徳元年極月十日／肥州山鹿庄於／金剛乗寺書寫畢／金剛資隆尊」と書かれた地図が発見された。建徳元年極月十日は西暦1370年12月10日にあたり、また肥州山鹿庄は熊本県山鹿市に比定される。このことから、室町時代初期の西暦1370年12月に、熊本県山鹿市金剛乗寺において、隆尊と言う僧侶が地図を筆写したことが明らかで、年代・場所・人物を特定した地図としては、わが国最古の地図である。

わが国における地図学史を明らかにするため、これらの地図を筆写し、検討することも重要であると考え、ここに報告する。

I. 京都・仁和寺に保存されている「日本図」

和紙に描かれている日本列島は、上が南方、左側は東方、右側は西方となっており、現在の一般的な方向とは逆である。中国地方の安芸国より西方は欠損し、一方の東北地方は広い範囲で陸奥と記載されている(第1図)。体裁は、いわゆる行基式で、各国々の輪郭を簡単に一筆で囲って

る。

これより前、『続日本書紀』の天平10年(738)8月の項に「令天下諸国造国郡図進」とあることから、(現存はしないが)国司は任地の国郡図を何らかの方法で作成し、提出したと推定される。朝廷は提出された国郡図を元に、支配する土地全体の概略を認知したのではないだろうか。行基式日本図を発案した行基(668~749)が、日本全体の概略をどのようにして知り得たかについての手掛かりは全くない。しかしながら、晩年の天平17年(745)1月には大僧正に任ぜられているところから、各国の国司から提出された国郡図を目にし、それまでの布教活動における経験を加えて、行基式日本図を発案したとも想像される。

いずれにしても、京都・仁和寺に保存されている日本図は、行基式の様式である。

図には、薄い朱色で幹線道路が描かれている。5本の幹線道路の出発地点はいずれも山城で、トウカイトウ(東海道)・トウセンタウ(東山道)・ホクリ□タウ(北陸道)・セムツムタウ(?) (山陰道)などと記されているが、山陽道の表記はなく、四国へ向かうナムカイトウ(南海道)は紀伊国から淡路島を経て阿波・讃岐へ向かっている。また、山背ではなく山城となっている。これらのことから、この日本図は、中心地である都が山城へ移った延暦13年(794)11月以降に製作されたことが分かる。

次に、地方別に検討することにしよう。

北海道は損失のため、輪郭の一部がわずかに残っているのみである(第2図)。

南海道は紀伊・淡路・阿波、および讃岐の一部が描かれているが、伊予と土佐はほとんど残っていない。紀伊の南端には熊(?)野と書かれ、志摩との境界が描かれていない。讃岐と淡路の間にある「せうツシマ」は小豆島であろう。

山陽道は安芸・備後・備中・備前・美作・播磨が描かれ、美作は10

郡、播磨は12郡となっている。

山陰道は伯耆の一部・因幡・但馬・丹後・丹波の各国が描かれているが、隠岐・石見・出雲は損失している。よく見ると、丹後・丹波の「丹」は「舟」となっている。

畿内には「五畿」、あるいは「コキナイ」と書かれた、摂津・和泉・河内・大和・山城で、摂津には12郡、大和には15郡、そして山城には□郡と付記されている。

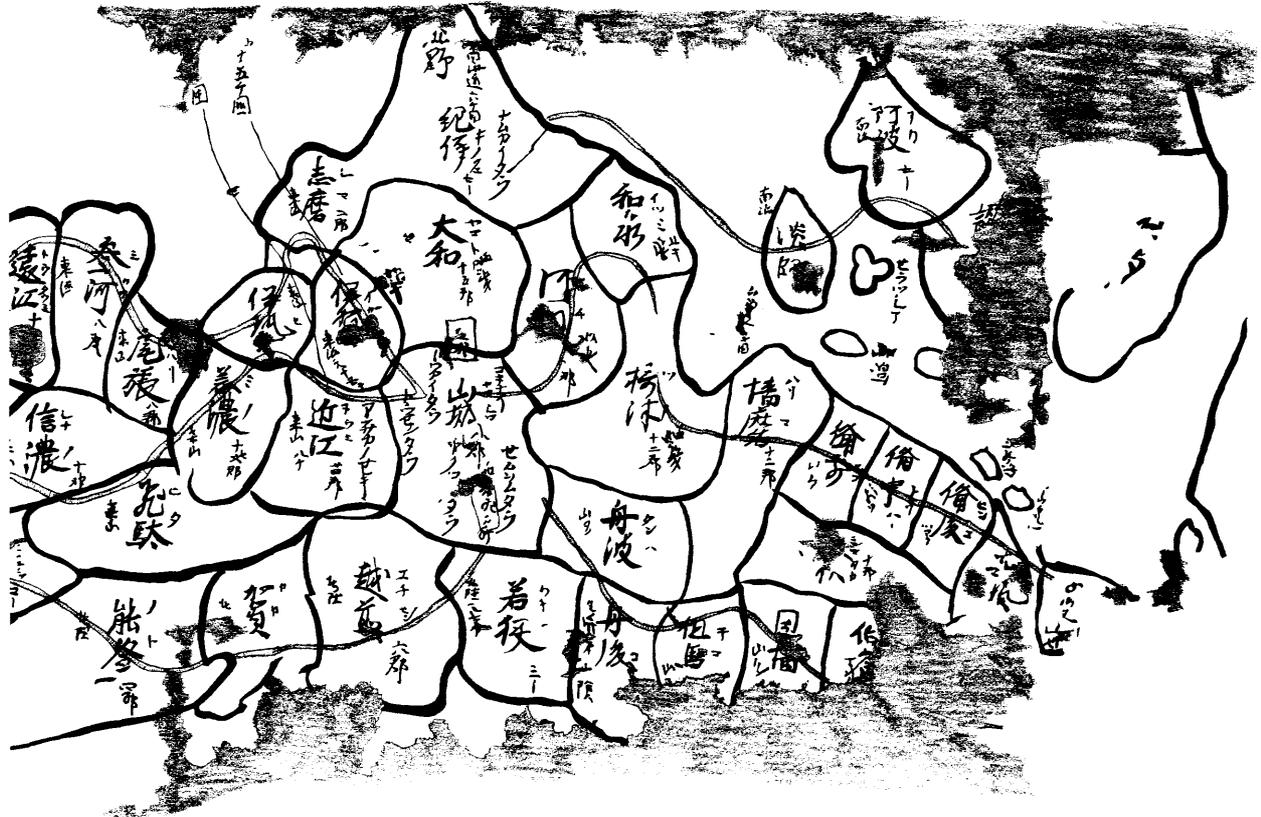
東海道は「十五ヶ国」と書かれているが、志摩・伊賀・伊勢・尾張・参河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸の15か国である。志摩には2郡、尾張と参河にはそれぞれ8郡、伊豆3郡、甲斐4郡、武蔵21郡、安房・上総・下総にはそれぞれ11郡、常陸には12郡と付記されている。そして安房の南方洋上には「イツノ大嶋」、すなわち伊豆大島が浮かんでいる(第3図)。

東山道は近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・出羽、そして広大な陸奥である。近江は24郡で、山城との境界には「アフサカノセキ」がある。美濃には17郡、信濃には10郡、上野には14郡、そして陸奥には35郡と付記されている。陸奥の南部には「シラカワノセキ」が位置している。相模から武蔵に行った官道は東京湾を横切り安房へ向かい、そこから常陸を目指している。大和武尊伝説によると、渡ったのは横須賀市走水と木更津市の間であるが、図では対岸が安房となっているので、伝説とは異なる。一方、菅原孝標女が著した『更級日記』は康平3年(1060)頃の成立であるが、主人公が京から上総の国府に向かったのは、相模の「にしとみ」から「まつさと」や「くろとの浜」などを経由する、東京湾を大きく迂回するコースであったので、これとも異なっている。

北陸道は、若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡・出羽の各国が描かれている。越前には6郡、能登には4郡、越後には8郡、佐渡には3郡が置かれていたことがわかる。この中で、和銅5年(712)に成立した出



第1図 京都・仁和寺に保有されている「日本図」



第2図 仁和寺に保有されている「日本図」の右側部分



第3図 仁和寺に保有されている「日本図」の中央部部分

日本八道 五等 五ヶ國
 東海道十五ヶ國 東山道八ヶ國 北陸道七ヶ國
 出羽道八ヶ國 山陽道六ヶ國 布海道三ヶ國
 九ヶ國 五ヶ國 八ヶ國
 新基菩薩樹林
 東西二千八百七十里 南北五百廿七里
 勅教六百七十八 禪教三百七十九
 人教百九十一 方九十九 方百九十二
 延元三年大呂新宮 仁和寺 仁和寺 仁和寺

第4図 仁和寺に保有されている「日本図」の左側部分

羽は東山道に属していたが、ここでは北陸道になっている。一方、加賀は弘仁14年(823)に越前から分置されているので、図はそれ以降に描かれたと考えられる。

図の左端には、以下の説明文が記載されている(第4図)。

「 日本八道 五畿 五ヶ国
 東海道十五ヶ国 東山道八ヶ国 北陸道七ヶ国
 山陰道八ヶ国 山陽道八ヶ国 南海道六ヶ国 西海道
 十一ヶ国 以上六十八ヶ国
 行基菩薩御作
 東西二千八百七十里 南北五百卅七里
 郡数五百七十八 郷数三千七百七十里
 人数六十九億一万九千六百五十二人
 嘉元三年 大呂□□□寫之所□□□□ 」

これらのことから、行基式によって作製された地図を、嘉元3年(1305)に写したことが分かる

Ⅱ. 坊津歴史資料センター^{きしんかん}輝津館に保存されている「日本図」

この地図は、3枚の和紙を横に張り合わせた、高さ136～140mm、幅約720mmの大きさの紙に描かれている(樋口, 2005)。国土の輪郭は幅約24cm、縦約7.5cmで、密教の修法に用いる^{どっこ}独鈷に似ている(第5図)。中央には大和国を中心に五畿内が書かれ、西側には西国の九ヶ国が、東側には東国の八ヶ国の輪郭がブロック状に描かれているが、具体的な国名は記載されていない。

紙面の右側には急峻な山岳が描かれ、

「 河有八湫
 六一山
 龍穴

東	□□	西
	住所	佛隆寺
精進峯		
護応窟		」

の文字が記載されている(第6図)。

また、^{どっこ}独鈷状輪郭の右上には、

「 大日本國ハ独古形
也独古即大日
如来独一法界
三昧耶形也 」

右下には、

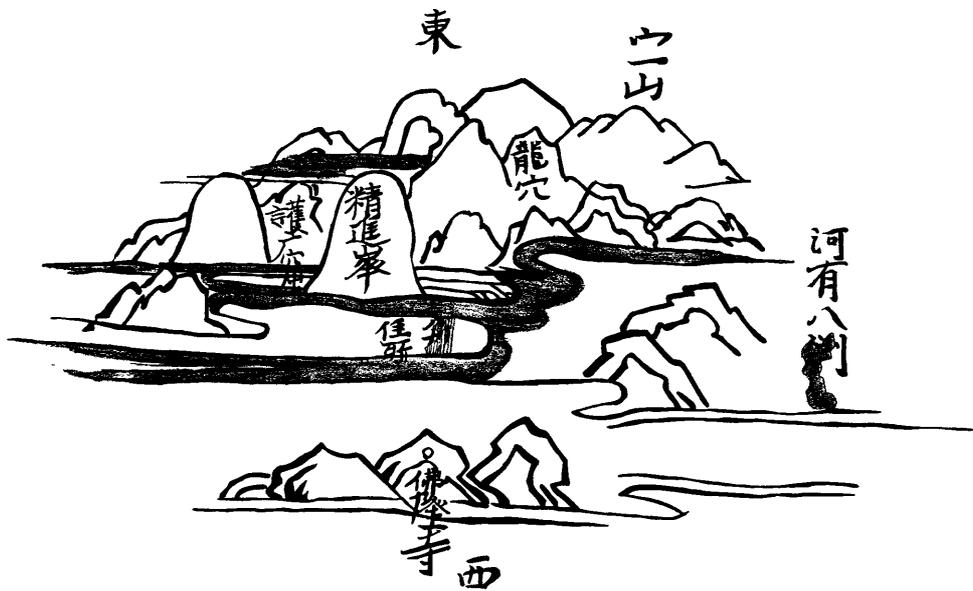
「 東國ハケ國有之東方
台藏界表示也 」

中央右下には、

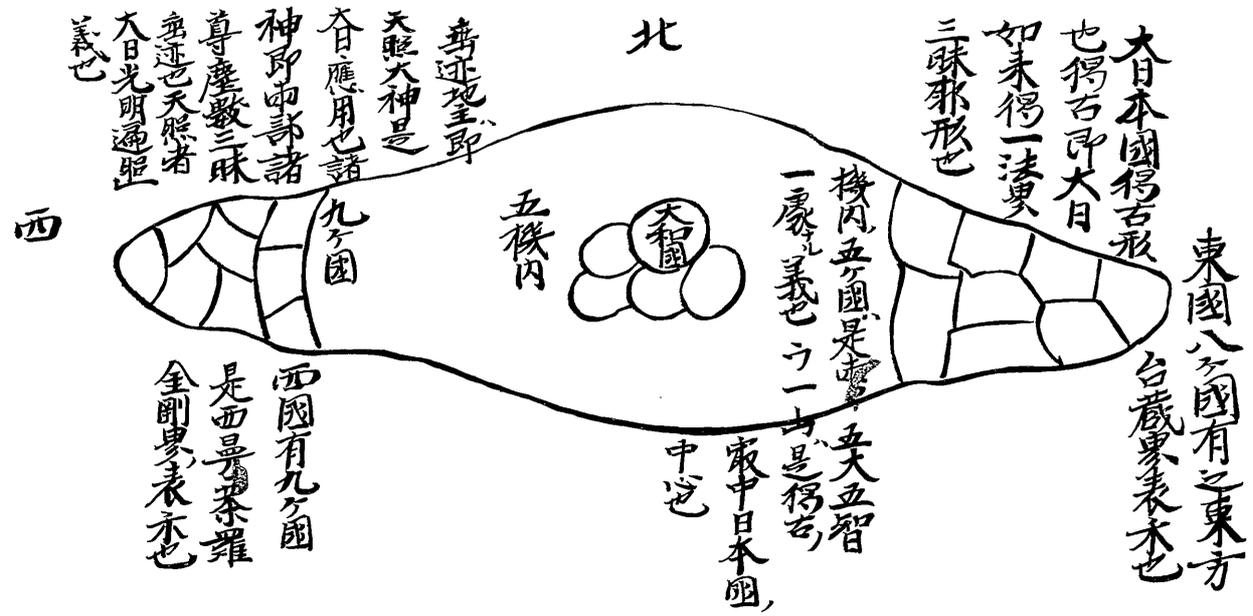
「 機内ノ五ヶ國ハ是岡部五大五智
一處ナル義也一山ハ是独古ノ
最中日本國ノ
中心也 」

左上には、

「 垂迹地主ハ即
天照大神是
大日應用也諸
神即兩部諸
尊塵数三昧
垂迹也天照者
大日光明遍照
義也 」



第6図 輝津館に保有されている「日本図」の右側部分



第7図 輝津館に保有されている「日本図」の中央部分

達徳元年癸酉月十日肥州山麻庄於

金剛來寺書寫畢

金野資陰書



第8図 輝津館に保有されている「日本図」の左側部分

左下には、

「 西國有九ヶ國
是西曼茶羅
金剛界ノ表示也」

とある(第7図)。

そして、左端には、朱で

「 建徳元年極月十日肥州山鹿庄於
金剛乗寺書寫畢
金剛資隆尊 」

と書かれ、その左側にも雲上(海上?)に急峻な山岳風景が描かれている(第8図)。

すでに樋口(2005)などによって指摘されているように、図は密教の影響を強く受けている。^{べんいちやま}六一山は真言宗の開祖である空海が中興したと伝えられる室生寺や、空海が開創した大野寺が位置する室生村一帯の山地で、起伏が大きい溪谷には洞窟などがあり、現在でも霊場としても知られている。独鈷状に描かれた国土の中心に五畿があり、その中に^{べんいちやま}六一山が位置する大和国があることから、^{べんいちやま}六一山を日本の中心に置き、あるいは国土の周辺に記入された文字も、宗教色を強く反映している。

最後にある、「建徳元年極月十日……」から、この地図が西暦1370年12月10日、熊本県山鹿市の金剛乗寺で、隆尊が筆写したことが分かる。

Ⅲ. 地図が作製された頃の時代的背景

保元元年(1156)に起きた保元の乱を機会として、以降、武士がますます台頭するようになった。さらに、平治の乱(平治元年・1159)によって平氏の時代となり、各地で豪族が勢力を持つようになったが、建久3年(1192)に源頼朝によって鎌倉幕府が開かれた。幕府は従者として奉公に励む豪族には御恩を与え、そうでない者に対しては厳しく対応した。いわゆる、封建

制度が確立されていったのである(家永三郎編, 1977)。御家人や国衙などは本領や自分の支配地を護るために努力し、下地中分図を作成した(角田, 1998)。一方、幕府は彼らを統率することには熱中したが、日本全体の地図や地理的知識に関心を持つ必要はなかった。そのような折り、以前から朝貢を求めている元が、文永11年(1274)に大軍をもって攻めて来た。幕府と西国の御家人たちが防衛に努めたため、どうにか退けることが出来た。7年後の弘安4年(1281)には再度、元の襲来があったが、幕府の統制のもとで西国の武士たちがよく戦ったため、その時も撃退することが出来た。

二度にわたる蒙古襲来を善戦によって撃退したが、一方で、幕府はいつまた襲来するかも知れぬ元の力に戦きながら、支配する領域を確定し、その全体像を知る必要を痛感したに違いない。それまでの日本全図と言えば、いわゆる「行基式日本図」で、国内の概要を表示した程度の地図であったが、世情によってさらに詳しい全国図が要求された結果、仁和寺に保存されている嘉元3年(1305)の、幹線道路や郡数が記載された全国図を作成されたと考えても、大きく間違っていないであろう。この地図は、いわゆる国家を意識しての地図であると考えられる。

次に、坊津歴史資料センター^{きしんかん}輝津館に保存されている日本図に関してであるが、最澄や空海はいずれも渡唐し、それぞれ天台宗や真言宗をひらいた。その後、鎌倉時代になると法然は浄土宗を、親鸞は浄土真宗を、一遍は時宗を、栄西は臨済宗を、道元は曹洞宗を、そして日蓮は日蓮宗を、それぞれ開いた。いわゆる鎌倉仏教の興隆である。これに対して、天台宗・真言宗あるいは浄土宗といった旧仏教各派は、古くからの山岳仏教と結びついた修験道を行うようになった。

このような世情の中で、元弘3年(1333)には鎌倉幕府が滅亡し、政治勢力が不安定な室町幕府が成立した。南朝と北朝に分かれた政治情勢の中で、庶民が求めたのは仏の教えにすぎり、極楽浄土への帰依であったと考

えられる。そのような状況の中で、肥後山鹿庄真言宗に属する金剛乗寺で、建徳元年(1370)に、僧の隆尊が地図を筆写したと考えても、大きな間違いはないであろう。

まとめに代えて

2枚の日本図が作成された鎌倉時代後期から室町時代前期にかけての時期は、わが国が大きく変わる時代であった。政治的には、元の襲来によって国家を意識せざるを得ない時期であり、精神文化的には、混乱する不安定な時期であった。このような中で作成された地図が、現存するわが国最古の全国図なのであろう。このように、地図は当時の社会情勢を反映していると考えられる。

謝辞

報文を作成にあたり、東京都青梅市文化財保護指導員の儘田小夜子氏には、地図に書かれている文字の解説に協力して頂いた。記して謝意を表する。

参考文献

- 樋口 亘 (2005) 坊津歴史資料センターきしんかん輝津館所蔵「日本図」, 地図中心, (392), 15～17. (本報文に掲載した日本図は, 本論文から写筆した)
- 家永三郎 編 (1977) 『日本の歴史』(2), 211ページ. (ほるぷ出版)
- 日本史広辞典編集委員会 (1997) 『日本史広辞典』, 2275+164ページ. (山川出版社)
- 中村 拓 監修 (1972) 『日本古地図大成』, 278ページ+地図133葉+解説(96ページ). (講談社) (本報文に掲載した日本図は, 本論文から写筆した)
- 織田武雄 (1972) 行基図の成立とその影響, 中村拓監修『日本古地図大成=解説』, 8～12. (講談社)
- 角田清美 (1998) 日本における地理的視野の拡大・私考, 専修人文論集, (62), 21～78.